

御祭神 藤原鎌足公

舒明・皇極二代の天皇の世、蘇我蝦夷と入鹿親子の勢力は極まって、国の政治をほしいままにしていました。

この時、中臣鎌子(後の藤原鎌足公)は強い志を抱いて、国家の正しいあり方を考えていました。

たまたま飛鳥の法興寺(今の飛鳥寺)で蹴鞠会(けまりえ)があったとき、
聡明な皇太子として知られていた中大兄皇子(後の天智天皇)にまみえることができ、
西暦 645 年の 5 月、二人は多武峰(とうのみね)の山中に登って、「大化改新」の談合を行いました。

後にこの山を「談い山」「談所ヶ森」と呼び、談山神社の社号の起こりとなりました。

ここに鎌足公は真の日本国を発想し、日本国が世界に誇る国家となるため、一生涯を国政に尽くしました。

天智天皇 8 年(669)10 月、鎌足公の病が重いことを知った天智天皇は、みずから病床を見舞い、
大織冠(たいしよくかん)を授けて内大臣に任じ、藤原の姓を賜りました。

藤原の姓はここに始まります。

鎌足公の没後、長男の定慧和尚は、留学中の唐より帰国、父の由縁深い多武峰に墓を移し、
十三重塔を建立しました。

大宝元年(701)には神殿が創建され、御神像をお祭りして今日に至ります。